

第2話 パソコンの人

by 風っ子

真鍋健一は、12インチのディスプレイに、大きく「ただいま散歩中」とスクロールするスクリーンセーバーを確認して、いつものように院内散歩に出かけた。

院内散歩といっても病院内を隅からすみまで歩くわけではない。ほとんどは同じ階の食堂でテレビを見たり、週刊誌を読んだり、ぼんやり外をながめている。9階にあるこの食堂—といってもここで食事を出すわけではなく、患者や介護の人が給食や弁当を食べるための大きな部屋—である。

9時の消灯までには病室にもどるつもりだったが、9階から見える外の明かりや車のヘッドライト、ぽっかり浮かんだ三日月を見ていると、何だか病室で寝る気がしなくなった。

『もう三ヶ月か—』

ため息といっしょに出た言葉が大きな窓ガラスの外の空間に吸い込まれていった。少しひ弱そうで、睫毛の長い、いかにも母性本能をくすぐりそうな顔が何とはなしに外を見る。ぼんやりした月明かりに真美の顔を思い浮かべた。

二月の、いつもよりことさら寒かった夜、真美を家まで送っていった帰りのことだった。自分のアパートに向かう坂を登り切った時に、胸に激しい痛みを感じ、その場にうずくまる。健一は、このまま死ぬのではないかという恐怖と戦いながら、凍てついた道を這うようにしてアパートにたどりつき、自分の部屋から救急車を呼んだ。

心筋梗塞という診断だった。それ以来入院を続けていることになる。

初めのうちは毎日のように来てくれた真美もしばらく来なくなった。友達からのメールも随分きていたのに、このごろはぱったりだ。ソフトメーカーのバージョンアップ情報や、懸賞サイトの案内メール位しか来なくなった。「去るもの日々に疎し」ではないが、これが世の中なのだ。真鍋健一も最初は恨んだりしたが、淋しくないといったらウソになるが、この頃はそのことについてあまり考えないようにしている。

仕事のこと、初めは苦しい位に気になって、居たたまれなくなるときもあったが、最近はあきらめた。なるようになるしかしょうがない、というもつともな事実が気が付いたからである。

「消灯になるとつらいですなー、真っ暗でなーんもできへん。病人はいいかもしれんけど、私ら付き添いはたまりませんわー」

関西なまりの男の声にふっと我にかえった。健一はあいまいに笑って返事をした。

この男は、同じ階に入院している母親の介護に来ている。何でも、遠い大阪から長い休暇をとってきているらしい。いつもこの時間に食堂に顔を洗いに来る。ついでに歯磨きもすませ、食堂の自動販売機で買ったコーヒーをゆっくり飲むのがこの男の習慣のようである。

『僕の方が夜はつらい。退屈なんて、そんなもんじゃない。暗闇の中に浮かんでくる不気味な恐怖と戦わなくてはならないんだ。みんな安定剤なしじゃ眠れないんだよ。わかるかいおじさん！』

健一は心の言葉を窓の外の三日月にぶつけた。

でも、この関西のおじさんも決して悪い人間ではない。健一もよーくわかっている。だからこそ口には出さなかった。半分眠ったような年老いた母親に一生懸命話し掛け、足をマッサージしたり、入れ歯をていねいに洗ったり、食事をさせたり、いろいろな介護をこまごまと、さも当然のように、せっせとしている姿をいつもみている。

「田中さんも、いつもいつもたいへんねー」

看護師に声をかけられると、

「今まで、随分親不孝しましたからなー、これも罪滅ぼしですわー」

などといって笑っている。誰にも愚痴ひとついわない。同じ階のいろんな人に話しかけたり、冗談をいったりして笑わせている。この男がいなかったら結構淋しいだろうなどと健一も思う。



部屋にもどると、真美から珍しくメールが入っていた。

『健一今晚は、具合はどう？なかなか連絡できなくてごめんね。大学の方が忙しくてなかなかね…。早くよくなってください。これからも良い友達でいようね。じやーまた。』

たったそれだけのメールだった。

『これからも良い友達でいようね…か！』

今までそんなことは一度も言ったことがない。ことさら「良い友達でいようね」なんていうのは、「さよならしましょう」と言っているようなものだ。

健一は、真美と過ごした日々をふっと想った。

合コンでの出会いから、初めて健一のアパートで結ばれた日や、ケンカしたこと、一泊の温泉旅行に行ったこと。あの時は本当に楽しかった。真冬の飛騨高山の街を寄り添って歩いた夜。真美の手が健一のポケットの中で冷たくなっていた。小さな民芸風居酒屋で、深夜までいろんな話をした。健一の小さい頃の話、真美の中学の頃の初恋の話、健一は、その初恋の相手に少し嫉妬した。

「僕と初恋の相手とどっちが好き？」

「どっちでしょう？初恋の相手かな」

「こいつーー！」
ベッドの上での戯言。



三日月と真美の横顔がダブって消えた。
「そうか、そういうことか」
健一は、怒ったり、悲しんだりする気にもなれなかった。すでにわかっていたことなのだから。

健一は真美に **RES** を書いた。
『真美、メールありがとう。僕はだいぶ良くなった。たぶん来月には退院できるだろう。今までありがとう。これからも良い友達でいよう、では。』
「良い友達」という文字列に傍点を設定したのが、健一のせめてもの抵抗だった。

健一はメールを送信トレイに入れ、同じ階にある IC 公衆電話からメールを送った。

そのあと、アドレス帳から真美のメールアドレスを削除した。同時に真美からのすべてのメールも完全に削除した。

『バイバイ！』
健一から真美のメモリーが完全に削除された。
パソコンのゴミ箱がすっかり空になった。同時に、健一の心にどうしようもない穴がぽっかり空いた。